

氏 名 (本籍)	はた 幡	や 谷	あきら 明 (島根県)
学 位 の 種 類	文学博士		
学 位 記 番 号	乙第27号		
学位授与の日付	平成4年1月28日		
学位授与の要件	学位規定第3条第2項		
学 位 論 文 題 目	(主論文) 浄土教における菩薩道の研究		
	(副論文) 浄土論註上下二卷対照表		
論 文 審 査 委 員	(主査)	文学博士 教 授	寺 川 俊 昭
	(副査)	文学博士 教 授	小 川 一 乗
	(副査)	文学博士 教 授	鍵 主 良 敬
	(副査)	文学博士 講 師	細 川 行 信

### 学位請求論文審査要旨

#### 〔論文内容の要約〕

主論文および副論文から成るこの学位請求論文のうち、主論文の論考の構成は、筆者自身の目次によって、次のように示されている。

#### 緒 言

#### 第一章 インド浄土教における菩薩道

##### 第一節 『大無量寿経』における菩薩道

##### 第二節 龍樹における菩薩道

##### 第三節 世親における菩薩道

#### 第二章 曇鸞における菩薩道

##### 第一節 曇鸞教学の形成過程

##### 第二節 曇鸞における菩薩道

##### 一 曇鸞の時機観——曇鸞教学の基底

##### 二 浄土観——真実功德の世界

##### 三 願生論——願生と浄土

##### 四 他力回向論——浄土の大菩提心

### 第三章 親鸞における菩薩道

#### 第一節 親鸞教学の形成過程——特に法然・善導教学の受容について

#### 第二節 親鸞における曇鸞教学の受容と展開

#### 第三節 親鸞における菩薩道

##### 一 横超断四流の意義——親鸞の生死観

##### 二 親鸞の還相回向論

周知のように筆者は、曇鸞の思想研究において多くの業績を発表して、すでに高い評価を得ている研究者である。この論文は、筆者の多年にわたる曇鸞の思想研究並びに親鸞の思想研究を基礎として、親鸞が開頭し、その書簡において自ら「大乘の至極」と呼んだ浄土真宗について、それを浄土の大菩提心と親鸞が積極的にとらえた本願の信において、凡夫として生きる人間を“菩薩”という意味をもつ存在に転じていく自覚道と把握し、その意味で“大乘菩薩道”というべき積極性をもつ仏道であることを、非常に広い視野をもって論考し、かつ論証しようとしたものである。そしてこの仏道を形成した伝統を、親鸞の了解に従って、このような菩薩の精神を法蔵菩薩の願行として説く『無量寿経』の教説を起点とする、龍樹・世親・曇鸞・善導・法然というすぐれた大乘の仏教者たちの思想における菩薩道の開頭であることを論定すべく、考察を進めている。そしてこれらの仏教者たちが形成し内容づけた菩薩道の思想を受容して成立したものとして、親鸞が開頭した浄土真宗を把握する。そして「大乘の至極」という真宗の積極性を強調する言葉に留意しながら、その“菩薩道”としての重要な内容としてことに“還相回向”に力点を置きつつ、これを主題的に取り上げて論考を展開している。

このような関心に立って作製された主論文において、筆者は浄土教において、大乘仏教が顕揚した菩薩道がどのように内容づけられ解明されているかを、きわめて多くの資料に基いて考察していくのであるが、その主たる意図は、曇鸞・親鸞の提示した「浄土教史観」の意義の解明にあるとしている。その論考の概要は、次の通りである。

第一章は「インド浄土教における菩薩道」であるが、筆者はインドにおいて十分な実質をもったものとして浄土教が形成され成立していたとし、これを「インド浄土教」と呼ぶ。そしてこの伝統の形成に重要な意味をもつ『無量寿経』について考察する。周知のように大乘仏教は、智慧を根拠とする慈悲の実践を強調する宗教運動であるけれども、この慈悲行をよく表わすもの

が『華嚴經』の主題の一つである普賢行であると、筆者は了解する。そしてこの普賢行が、法蔵菩薩の願行による群萌の救済を説く『無量寿經』において、重要な意義をもつものとして積極的に取り入れられて、利他教化地の益とされる還相行の解明に大きく寄与したとして、筆者はここに浄土教における菩薩道のいわば“原型”とでもいうべきものを見ようとしている。

次いで「龍樹における菩薩道」において筆者は、龍樹が開頭した「信方便の易行道」について論考する。よく知られているように、龍樹は『般若經』の主題である“空”の思想に立脚して釈尊の縁起の教説を展開し、般若中観の思想を開拓した大乘の思想家であるが、その仏者としての信仰的立場には『無量寿經』の浄土教思想がみられると論考し、さらに群萌に対する大乘の仏道の開示をその撰述の意趣とする『十住論』によって、菩薩道が主体的・実践的に必然するものとして信方便の易行道を解明しようとしている。

さらに「世親における菩薩道」について、筆者は龍樹の般若中観と並ぶ大乘仏教の伝統である瑜伽唯識学派の大成者である世親の基本的立場を論考する。そしてそれを大乘仏教が顕揚した力動的涅槃観である“無住処涅槃”の思想を、根拠の転換による法界の現成という実践的そして理論的立場から明確化したものとして、論考するのである。そしてこの仏教的立場と、世親の『浄土論』に示された浄土教思想との対応性・関連性を考究して、釈迦・弥陀二尊の教命に賜わった一心帰命の信を表白した『願生偈』と、『無量寿經』によって“観見願生”の仏道を優婆提舎した『浄土論』をもって、世親の宗教的立場の究極である阿弥陀の見仏を表わしたものと、了解していく。

第二章の「曇鸞における菩薩道」は、筆者も述べているように、この論文の主軸をなすものと考えられる。この章において筆者はまず曇鸞の立場を、『論註』の冒頭に明かされるように、龍樹の難易二道を受けてそれを“自力”と“他力持”という質的相違をもつものとし、その易行道の伝統に立つものとして把握する。そしてさらに『浄土論』に依って、浄土教が如来の利他行である本願住持力を増上縁として、人間が大乘正定聚の数に入ることを内容とする大乘至極の宗教であることを明らかにした仏教者であることを、曇鸞について解明していくのである。

さらに進んで筆者は、曇鸞教学の形成過程を、曇鸞が生きた当時の中国仏教界の状況に広く眼を注ぎ、その生涯の行実にも細かい注意をはらいながら考究していく。それは、インドとは異質の文化世界である中国において、イ

ンドにおいて成立した大乘仏教がどのように吸収され展開したかについての研究が、筆者において重要な問題であると認識されていたからである。

こうして筆者は、曇鸞が果たした思想的事業の意義を、次のように捉えていく。すなわち五濁無仏の時代に生きる煩惱成就の凡夫として自己を自覚した曇鸞が、如来の真実功德の世界である浄土を願生する仏道において、願作仏心・度衆生心を内実とする菩薩の巧方便回向である浄土の大菩提心が、広略相入の道理によって具現されること、そしてそこに往還の二回向が実現されていくことを、大乘仏教ことに中国般若学に立脚して開顕し得たとするのである。

さらに筆者は、大乘仏教において業報による輪廻の超越を可能にする重要な教学概念であった“回向”の思想が、曇鸞によって阿弥陀の本願力回向を頭わす根本語として、独自の意義づけが行われたことを論考する。これによって、大乘仏教が標榜した菩薩における無住处涅槃の行が、如来の本願住持力に立脚する“往還二回向”として明らかにされたことを、筆者は克明に論究していくのである。

第三章において筆者は、「親鸞における菩薩道」について論考を進める。この章での論考は、親鸞の思想研究を専攻とする筆者にとって、第二章と並んで、そのもつ意義においてはそれ以上のものをもつものであろうかと考えられる。ここで筆者はまず、日本浄土教の主流を形成したと考えられる善導・法然の伝統について考察する。そしてこの善導・法然の伝統に連りつつ、さらにそれが世親・曇鸞の教学に拠って、「親鸞」の名のりのもとに大乘至極の宗教というに値する実質をもつものとして形成されていったことを、越後流罪以後の親鸞の行実注意到しつつ、主として『教行信証』・『入出二門偈頌』さらに『愚禿鈔』などの親鸞の著作によって考察している。その要点は、曇鸞が提起した“他力回向”の思想をさらに徹底させて、衆生に獲得される選択本願の行信は全く如来の本願力回向によって“回向成就”した根源的覚醒であることを、十分に解明した点にあるとしている。そして自ら“親鸞”と名のって「無戒名字の比丘」に自らを擬した親鸞の上に、願作仏心・度衆生心という崇高な自利・利他の志願に生きた“大乘の菩薩”の真面目を見出すとしている。

最後に筆者は、以上の論考を踏まえて、親鸞における菩薩道について論述する。その眼目は、親鸞がいのちとした“信心”，その信心に生きる願生の

主体が、そのまま大乘の菩薩道を果遂していく主体であるとする点にあるようである。そしてそれを敷衍して、衆生を救済する大悲回向心は、如来によって救済された衆生における“還相利他行”として、無限に展開せられていくものであると論考していく。

### 〔審査結果の要旨〕

以上は、主論文における論考の眼目というか、要点というべきものを、ごく簡略に列記したに過ぎないが、筆者はこの論文においてきわめて広い視野に立ち、多くの資料および最近の仏教思想研究におけるすぐれた業績を渉猟して、まことに精緻な論証を試みながら、論題についての研究を進めている。ことに親鸞が開頭した仏教である浄土真宗について、それが単にいわゆる聖道門に相対する意味での浄土門であるにとどまらず、親鸞が敢えて「大乘の至極」といったように、十分の内実をもった堂々たる大乘仏教であることを、力を尽くして解明しようとしている。その具体的な解明点が、浄土真宗とは凡夫に開示された大乘の菩薩道であるとする点にあり、このことを、大乘仏教の伝統を形成した代表的な仏教者の思想研究を通して解明しようとしたところに、この論文の特色があると考えられる。そしてこの思想の伝統を受容して形成された“大乘の菩薩道”としての浄土真宗の要というべきものを、自信教人信の志願に立った“常行大悲”の実践のところに、これを親鸞における“還相利他行”とするのである。この考察・解明のところに、この論文の主眼があり、また積極性があると考えられる。

最後に強いてこの論考の問題点というべきものを挙げるならば、筆者も言及しているように、問題は親鸞における二種回向ことに還相回向の了解のところにある。筆者は注意深く論考しているけれども、それを如来の回向によって往相道に立った衆生が常行大悲の実践によって還相行を行ずる者となり、これを菩薩の行を象徴する普賢行に等しいものとみることによって、その衆生に“菩薩”の意義が実現すると主張しているようであるが、実はこのような還相回向の了解は、現在までの真宗理解において多くの研究者に共有されている見解であり、その意味で“伝統的”な了解の一つである。そしてこのような了解を、いわば思想史的な関心に立って論証し、“菩薩道”という明確な像を与えたところに、この論文の積極性があるというべきかと考える。

しかしながら、親鸞はきわめて独創的な仏教理解を展開した仏教者であっ

たとえられる。例えば親鸞は自己を徹底して“煩惱具足の凡夫”と自覚して、そこから眼をそらすことはしない。そして祖師と仰いだ仏教者たちの著作を学ぶについても、そこに語られる「菩薩」はすべて“法蔵菩薩”に帰して了解し、自己において“菩薩行”を実質あるものとして語ることはしなかったように思われる。従って二種回向についても、あげてこれを法蔵菩薩＝如来の行として把握して、自己＝煩惱具足の凡夫は、その恩徳によって真実の信心を得、現生に正定聚の身となって願生道に立つものであることを強調し、そこに自己＝衆生の“分際”すなわち責任をもって立つ場を自覚していると解されるのである。筆者の論考は、親鸞における“菩薩道”を論証するにやや急であって、親鸞のこの独自の二種回向の了解を、その著作の全般にわたって検証することが必ずしも十分ではなかったのではないかと考えられる。しかし、親鸞の仏教の根幹をなす二種回向の理解については、本格的な議論が漸く始まったと解すべき状況であるから、筆者のこの幅広くかつ精緻な論考は、すぐれて積極的な意味をもつ見解の提起と評価すべきである。

以上のような講評に立って、審査委員一同は、幡谷明氏提出のこの学位請求論文について、十分に文学博士の学位を得るに値するものと判断するものである。

#### 〔最終試験及び語学試験〕

審査に当たって必要とされる最終試験および語学試験については、論文の内容およびそれに関連する事項についての面接試問、並びに語学試験を行い、筆者が学位規定の定めによって必要とされる学力を有していることが、確認された。

氏 名 (本籍)	な ばた 名 畑	たかし 崇 (岐阜県)
学 位 の 種 類	文学博士	
学 位 記 番 号	乙第28号	
学位授与の日付	平成4年1月28日	
学位授与の要件	学位規定第3条第2項	
学 位 論 文 題 目	(主論文) 『元亨釈書』の研究 (副論文) 『元亨釈書』索引	
論文審査委員	(主査)	文学博士 黒 田 俊 雄 教 授
	(副査)	文学博士 寺 川 俊 昭 教 授
	(副査)	文学博士 平 野 顕 照 教 授
	(副査)	文学博士 柏 原 祐 泉 講 師

### 学位論文審査要旨

#### 〔論文内容の要約〕

提出された学位請求論文は、主論文『『元亨釈書』の研究』と副論文『『元亨釈書』索引』及び、参考論文「中世における音の聖と俗—体制の「音」民衆の「音」—」「『元亨釈書』神祇観序説」「王権と仏教—『元亨釈書』の内容と構成—」から成る。主論文は、本文200字詰用紙685頁、副論文の索引は同用紙635頁から成り、主論文の内容は、序説、本論（三章）、結論から構成されている。

まず「序説—研究史にかえて—」では、最初に、添付した三点の参考論文が、著者の『元亨釈書』（以下『釈書』）に関係する既発表の論文であり、その内容は、(1)、『釈書』に道宣『続高僧伝』巻30雑科声徳編に基く声音の秩序に対する志向があり、それが『釈書』の著者虎関師錬（以下師錬）の国家観や専修念仏停止に関係すること、(2)、『釈書』の神社や神々に関する記事の分析整理から、その神祇観を考察したこと、(3)、『釈書』の中世仏教観および国家観を総括的にまとめたこと、を要約した。ついで、『釈書』に関する明治37年（1904）鷲尾順敬の研究から昭和61年（1986）佐藤静子の考察に

至る19氏の論考をとりあげ、現在に至る『釈書』研究の諸問題の所在を紹介、明示した。

つぎに第一章「虎関師錬と『元亨釈書』」は三節に分ち、第一節「著者略伝」では、弘安元年（1278）出生から貞和2年（1346）死没までの師錬の略伝と、とくに、徳治元年（1306）建長寺の一山一寧との出会いが『釈書』撰述の動機となったこと、また元亨2年（1322）8月後醍醐天皇に本書を献上した意義等に触れている。第二節「撰述意図及び周辺」では、本書が、日本仏教発展の700年にわたる高僧の伝を記すことで、仏法による国家擁護の歴史を検証するための編纂であり、それは師錬が朝廷・公家・武家と強くつながる寺々で、天台・密教・戒を学んだことと関係があらうと論じた。第三節「一部の構成」では、本書全30巻（「伝」巻1～巻19、「資治表」巻20～巻26、「志」巻27～巻30）の構成が、中国の梁・唐・宋の高僧伝に対し、南宋の志磐『仏祖統紀』を参照したとみられる、独自の構成であること等を考察した。

第二章『元亨釈書』と顕密仏教」は六節に分ち、『釈書』の内容を、日本仏教史の発展に即して整理し直し、年代的考察を試みたものである。第一節「聖徳太子観」では、『釈書』が、太子を、達磨の意をうけた慧思禅師の後身としたこと、太子・馬子の守屋誅殺は仏法の咎とならぬとすること、等を述べる。第二節「南都仏教一三論と唯識一」では、『釈書』における、奈良時代の三論・唯識関係の多数の僧伝を個別に整理・考察し、とくに唯識と後の平安仏教の人々や禅宗との関連に留意していることに注目する。第三節「顕教一法華一」では、平安時代の『法華経』に帰依した僧達の誦経・持経・写経・講経等の事跡を中心とした記述に留意するとともに、鎌倉初期の円爾弁円（師錬の師湛照の師）も持経者であったと推定する。第四節「密教」では、『釈書』が、平安時代の台密を中心とし、鎌倉初期の俊弼・弁円に密・台・禅の一致を見出し、特に法華と密教を合せた顕密仏教に多く触れていることを指摘した。第五節「浄土教」では、本書が浄土教を「寓宗」と扱っていること、奈良時代の智光、平安時代の空也・源信、鎌倉時代の源空等を古典的な浄土教として認め、それ以後の源空門流は「遺派末流」として触れていないこと、等を考察した。第六節「山の修練」では、『釈書』の記述が特に諸山における修練や靈験の記事に生彩があるとして、本書における国内の主要な山岳信仰とそれに関わる僧の伝記を詳細に整理し、以て、山に関わる宗教を、密教と法華を主とし、加賀白山の泰澄と高野山の空海の二派が根



幹をなすと捉えたとみる。本節は、日本独特の山岳信仰について、師鍊の対応を調べたものとして注目される。

第三章『元亨釈書』と国家は八節に分れ、前章で『釈書』の内容を日本仏教史の年代別に整理して考察したのに対し、国家観との関係で八項目を設け、課題別に考察したものである。第一節「国家と民」では、『釈書』の、天皇の超越的権威を主軸とする「国家」と「仏乗」の関係や、民の被教化者としての性格に関する記述を注目した。第二節「神祇観」では、師鍊が取りあげた、仏法を擁護するとされる伊勢神宮以下30余大社の神の性格を考察し、神祇における死穢等の禁忌が、大社では解除されてゆく動きをみるのに対し、淫祠にはそれが多いたったこと、等を考察した。第三節「大乘醇淑の疆」では、わが国を皇統一貫の仏法繁茂の国土とし、大乘とは師鍊にまで流れる禪と菩薩戒の流れを指すものとしていることを指摘した。第四節「率土の浜」では、中世における律令国家解体の時点で、師鍊がそれを理念的に登場させ、それへの強制と順応で「率土」の支配を秩序づけようとしたという。第五節「正像末の時機観」では、『釈書』が、神国思想で国の造成と歴史を構成するとともに、神の仏法守護で末法時代が克服できるとしていることを述べた。第六節「音声の秩序」では、音韻は、仏教の本体である清浄や国家の秩序などと関係するとされ、師鍊が声音への関心を深め、とくに道宣『続高僧伝』巻30雜科声徳編にいう「哀音亡国」説により、哀婉な読経を否定したことを説いた。第七節「女性観」では、「性」を捨てた出家持戒の尼僧は、仏の慈悲により男女平等であるとみたこと、また、多くの高僧達の母は、何らかの霊夢をみて聖なるものを宿し、以て「性」が「聖化」されたものとしたこと、師鍊の母への酬報の孝養が、その女性観の基礎をなしていること、従って『釈書』の女性の主題は「母」であること、などを推考した。第八節「民俗と伝承」では、とくに師鍊が、僧伝中に出る追儼、高野山納骨、十三回忌、その他の「国俗」に留意し、また、「世曰」「歌曰」「謡曰」として種種の伝承を書きとめていることを指摘した。最後の「結論—まとめにかえて—」では、以上の三章における記述を要約するとともに、さらに、師鍊は歴史を主軸に日本仏教を点検し、禪を中心として日本仏教の総合、体系化を試みたこと、或は、『釈書』編纂には日蓮の「四箇格言」の批判に応える意味もあったとみられ、禪の立場を中心に総合的に榮西『興禅護国論』を顕証し、念仏、真言、律についてもその批判に具体的な事例で応えたとみることがで

きる等と位置づけをした。

### 〔審査結果の要旨〕

以上が提出された主論文の概要である。本来、『釈書』の437名におよぶ僧伝を中心とした記述は、大部で且つ精硬であり、全体的研究は容易でないが、本論文では全文を精読し、『釈書』の中国語的表現をよく理解した上で、全体を自からの視点で整理し、独自の考察がなされている。本論文は、今まで総合的、本格的な研究が施されなかった『釈書』に対し、それを著者の永年の努力によって完うさせたものとして、その意義は大きい。

その研究の全体は、『釈書』の多数の僧伝中心の個別的伝記集形態の原型に対し、第二章を中心とする仏教史的視点での整理と、第三章を中心とする国家観を主軸とした課題別の視点からの整理とに基づく、独自の方法論を駆使して、『釈書』編纂の性格や内容等を明らかにしたものである。これらの整理の方法については、著者の日本仏教史全体への知悉、理解が背景になっていることを、充分窺わせるものがある。とくに本論文では、師錬の、国家観を基底として禅道へと絞りこむ『釈書』編纂の構成を、よく分析している。その第三章における八項目にわたる課題の設定などは、顕密体制論や女性と仏教との関連など、今日の学界における中世史研究課題にも留意して、『釈書』研究の問題意識やその今日的意味を明らかにするものとして、高く評価しうる。

また「序説」を中心として従来の『釈書』研究にもよく留意し、そのなかで本論文の位置づけを明確にしたし、また、副論文として添付された本論文の索引も、龐大な量と精密な項目設定とによって本論文の解説を補うものとして、その作成努力を多としたい。

しかし、本論文に対し、なお問題とすべき点がないわけではない。例えば、本論文で、『釈書』全体に流れる国家観や神国観について諸処で触れているが、全体としてそれは、どのような性格をもつものか、それと仏教、とくに禅道との関係を、師錬はどのように捉えたとみるのか、といった事柄がある。すなわち、師錬は、国家仏教・律令仏教を正当視するのか、鎌倉時代以後の神国観や朝廷観に対し、禅との接近期待をもったのか、本来の禅の世外性と国家観・神国観との関係をどのように考えたか、といった事柄である。或はまた、『釈書』を仏教史学史上、如何に位置づけるかも課題として残るであ

ろう。その他、全体の記述がやや総花的な感があり、従って更に問題意識を絞る方が記述を鮮明にしたと思われるし、また個々の説明や表現等に疑義を覚える個所が無いこともない。

とはいえ、以上の批評を加えた諸点は、本研究に対する補足的な意味での問題で、決して全体の研究成果を損うほどのものではない。著者は、本研究によって永く放置されてきた『積書』の全体像を始めて明確にし、以て、『積書』自体の総体的考察をはじめ、日本中世仏教史研究の上にも大きな前進を促したのであり、その業績は大変高い意義をもつ。故に、以上の審査によって、本論文が文学博士の学位に充分価することを認めるものである。

#### 〔最終試験及び語学試験の結果〕

なお、審査員全員により、提出論文を中心として、これに関連する諸事項および所定の語学に関する試問を行なった結果、すべて、大学院文学研究科博士課程修了者と同等以上の学力を有することが確認されたことを、併せて報告する。